
ルーシィがエルザでエルザがルーシィで

ルーシィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルーシーがエルザでエルザがルーシーで

【Nコード】

N2932N

【作者名】

ルーシー

【あらすじ】

あたし、ルーシー・ハートフィリア、17歳。今回はエルザと二人きりでクエストに行ったんだけど……入れ替わっちゃったの。

1・入れ替わり

あたしはルーシィ・ハートフィリア。フィオーレ王国のマグノリアにある魔導士ギルド……フェアリーテイル妖精の尻尾の星霊魔導士なの。

「ルーシィ、仕事に行かないか？」

と、カウンターの席に腰掛けているあたしに、緋色長髪で端正な顔立ちに銀の鎧と青いスカートを着用した少女がやってきた。

この方はエルザ・スカーレット。小さい時からこのギルドに居てあたしより二つ上の十九歳。彼女とは最近、二人だけでクエストに行く事が多くなってきたの。

「うん。今日はどこへ行くの？」

「これだ」

エルザが二階のクエストボードから取ってきた依頼書をあたしに見せる。

「街中で巨大バルカンにさらわれた女性を雪山まで助けに行く。準備は良いか？」

「ええ？ 何であんな寒い所まで行かなきゃならないのよ」

「ルーシィ、お前はそれでも妖精の尻尾の魔導士か？ それにお前はハルジオンに現れたラクリマジロとバードフットの二体を同時に倒した最強の魔導士じゃないか。ボスバルカンなんて楽勝だろ？」

うわあ……、また変な噂が立ってる……。

「ルーシィが居てくれれば私も心強い」

「あー、はいはい。行くわよ」

エルザは依頼書を白髪の美少女に差し出した。

「ミラ、これを頼む」

「了解」

フェアリーテイルミラと言うのは妖精の尻尾の看板娘ミラジェーンの事。だけど皆は彼女をミラと呼ぶの。

「はい、オッケーよ。気を付けてね」

「嗚呼、行ってくる」

あたしとエルザはギルドを出ると雪山へと向かった。

雪に覆われたハコベ山。ここは夏季でも雪が溶ける事がない。それどころか吹雪いていてとても寒い。

この山には以前、バルカン退治をしていたマカオさんを助けに向かうナツに興味本意で同行した事があった。

「ウッキー！ 可愛い女が二人やってきたぞ！」

と、真っ白な猿が現れた。

この猿がバルカン。バルカンは女好きでとても迷惑な奴なの。おまけに人間の体に乗っ取る事も出来る。

「ルーシイ、行くぞ！」

と、エルザが剣を取り出す。

あたしは腰に手を伸ばして鍵を一本取り外そうとした。

「あれ！？」

しかし、肝心のホルダーが無かった。

「エルザ、あたし鍵忘れちゃった」

「何！？」

「ゴメンネ。何とかして？」

「仕方ない！」

エルザは単身バルカンに戦いを挑んだ。

バルカンは素早い動きでエルザの攻撃をかわして反撃する。

「ぐわっ！」

攻撃を受けたエルザが吹っ飛んできた。

「ルーシイ、手を貸せ」

「え？ でもあたし鍵――」

「鞭があるだろう？」

あたしは嫌々と鞭を取り出した。

「ウホッ、ウホッ、ウホッ、ウホッ、ウホッ」

バルカンが胸を叩いて挑発してくる。

「えい！」

イラッとしたあたしは鞭でバルカンをひっぱたいた。すると、バルカンは気持ちよさそうな顔をした。

「キモ——ッ！」

あたしは鞭でバルカンをひっぱたきまくる。その度にバルカンが快感を覚えて喜ぶ。

「ルーシイがSに目覚めたか」

「目覚めてない——っ！」

「ウツキー！」

エルザへ突っ込んだ隙にバルカンがあたしを捕まえる。

「お前、気に入った。オデの嫁にする」

バルカンはそう言っていると、魔法で洞窟へテレポートした。

「あんた、街でさらった子はどこ！？」

「それは知らない。さらったのはオデじゃない」

「それなら良いんだ。じゃあね。バイバイ」

あたしはバルカンの手から脱出すると出口まで駆けた。

「お前はオデの嫁にすると言った筈だ！」

バルカンが正面に回り込んだ。

「貴様なんかにルーシイは渡さんぞ——っ！」

そこへ現れたのはエルザだった。

「エルザ！」

振り返るバルカン。

「何だお前？ オデたちの結婚式の邪魔をするのか」

「お前、何か勘違いしてないか？」

「勘違い？」

「ルーシイは男だ」

「はいイ！？」

「男、要らない」

エルザの言葉を真に受けたバルカンがあたしを腕で薙ぎ払った。

「きゃああああ！」

あたしは洞窟から飛び出して落っこちていく。

「ルーシー！」

エルザがあたしを追って飛び降りてきた。

「エルザ！」

あたしはエルザに手を伸ばした。

エルザはあたしの手を掴み、引き寄せて抱き抱えた。

「換装……天輪のよろ……ぐあっ!？」

換装しようとしたエルザだが、上から降ってきたバルカンの攻撃を受けて地面に激突した。

「痛！」

あたしは頭を思いつ切り打った。

「ちよつとアンタ！ 今のは反則でしょ!？」

「貴様ア！」

エルザがバルカンに飛びかかった。

バルカンは眼前に迫るエルザを殴り飛ばした。

「ぐあっ！」

吹っ飛ばされたエルザの頭とあたしの頭が激突した。

「うつ！」

あたしはその場に倒れて気を失った。

「う……、頭が痛い……」

と、意識を取り戻したあたしは呟いた。

「気が付いたか」

視界に黄色い髪に端正な顔立ちの少女が映る。

この少女には見覚えがある。この少女はあたしだ。

「え!？」

驚いたあたしは辺りを見渡した。

「エルザはどこ!？」

「ここだ。どうやら頭をぶつけたショックで入れ替わってしまったらしい」

「それじゃあ今のあたしの外見はエルザって事!？」

あたしが自分の体を改めると、エルザの普段着である銀の鎧と青いスカートを身に纏っていた。

「何で!？」

「知るか！ 兎に角、ギルドへ戻ろう」

「それよりバルカンは？」

「奴は倒した」

「そっか。じゃあ帰ろっか」

あたしは立ち上がり、エルザと共にギルドへ戻った。

ギルドに帰ってきたあたしとエルザ。

「ただいまー!」

騒がしかったギルドが一瞬にして静まり返った。

「皆、今帰ったぞ!」

すると、桜色短髪にマフラーをした男……ナツ・ドラグニルが言った。

「ルーシィ、お前キャラが変わってねえか？」

「そんな事無いわよ」

「エルザには訊いてねえよ！ て言うかお前も何か変だ!」

あたしとエルザはお互いの顔を見合う。

そうだ。今のあたしはエルザなんだ。

「ちよつと来て!」

あたしはエルザを外へ連れ出した。

「どうしたんだ、一体」

「今はあたしがエルザでエルザがあたしよ。入れ替わってるんだから、エルザはあたしを演じて。あたしはエルザを演^やるわ」

「そうか。すっかり忘れていた」

「忘れるな——っ！」

「鍵を忘れたんだ。お前も人の事は言えないだろう？」

「う……………」

「兎に角、ボロを出さない様に慎重にな」

そう言つて中へ入っていくエルザ。その後にあたしも続いた。中はすっかり騒がしくなっている。

「やあ。お帰り、ルーシィ」

と、エルザの前に現れたのは、眼鏡をかけたオレンジ短髪の男星霊ロキ。本当の名は獅子宮のレオ。彼はあたしの星霊んだけど、いつも勝手に出て来ては色んな女を口説き落としている女誑^{たら}しなんだ。

「ダメじゃないか、鍵を忘れちゃ」

ロキが沢山の鍵が付いたキーホルダーをエルザに渡した。

「すまん」

エルザはキーホルダーを腰に付ける。

「ルーシィ？」

ロキが疑問符を浮かべる。

「ロキ、ちょっと」

あたしはロキに手招きをした。

「な……………何だい、エルザ」

ロキが警戒しながらこちらへやってくる。

あたしはロキの手を掴むと外に連れ出した。

「良い？ 驚かないで聞いて。あたし、ルーシィなの」

「……………」

沈黙するロキ。

「ロキが今喋ってたのはあたしじゃなくてエルザよ」

「……………何を言ってるんだ？」

「あたしとエルザ、どうしてもかは知らないけど、入れ替わってるのよ」

「本当にかい！？」

「うん……。あ、この事は皆には内緒だよ」

「嗚呼、分かった」

「それより、どうしてまた勝手に出て来てるの？」

「良いじゃないか。そんな事は僕の自由なんだし」

「う……………」

何も言い返せない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2932n/>

ルーシィがエルザでエルザがルーシィで

2010年10月8日13時46分発行